坂本さんの話

「おっちゃん、なんで外で寝なあかんの?―こども夜回りと「ホームレス」の人たち」（あかね書房）より　（本では挿絵つき）

４・坂本さんの話

ぼくが小学校や中学、高校でする「野宿の授業」では、「野宿している人たちはどのように生活しているか」「野宿になる原因とは何か」「解決の方法はどういうものか」などについて話します。

そして、授業には、なるべく野宿している人と一緒に行くようにしています。こどもたちにとって、野宿している人と実際に会って話をすることは、とても大きな意味があるからです。

みなさんにも、ここで、野宿をしている人のことを知ってほしいと思います。そこで、ぼくが何度かいっしょに学校に行って話をしてもらった坂本さんを紹介したいと思います。

坂本さんは、釜ヶ崎の近くの公園で小屋を作ってくらしています。そして、「野宿している人たちのことを知ってほしい」と、自分から学校など話してくれるのです。

ここでは、坂本さんが自分のこどもの頃や、野宿になったようすについての長いお話しを紹介します。坂本さんがどんな生活を送ってきたのか、今どんなくらしをしているのか、ゆっくりと聞いてみてください。

生まれてから小学校まで

ぼくが生まれたのは１９６５年です。おじいちゃんとおばあちゃん、母と父とお姉ちゃんとの６人家族でした。

ぼくは子どもの頃から、父親は仕事で忙しくて、遊んでもらった記憶があんまりないです。そして、５才の頃に、理由はぼくははっきりと知らないけど、母親と父親が離婚したんです。

その後、母親が義理の父になる人と知り合いになって、ある日「今日からあっちの家で暮らすよ」ということになってね。６才くらいに大阪の阿倍野で暮らすことになりました。

最初はお姉ちゃんとぼくとで、親とは別のアパートに寝起きしてたんですよ。食事の時は親のところに行って食べて。ぼくが小学校の２年生のとき、姉ちゃんは親の方に寝起きするようにして、ぼくだけがそのボロアパートで寝起きしてたんです。

義理の父親がしつけとか厳しいんです。ぼくは小学校の頃はいい子だったんですけど、義理の父親と折り合いが悪くて、たまに機嫌が悪なったら「お前なんかこっちに来んでもええ」「お前はむこうのアパートに引っ込んでろ！」と言ってました。

２～３年した頃から「うちはテレビ一切禁止」と言いだしてね。小学校の２年生半ばくらいからはテレビ見せてもらってないです。友だちともテレビとかになったらまったく話わからない。だから、他の子と話すのも困るようになった。

それと、小学校５～６年生になったら外に遊びに行くのも禁止だったんです。悪い影響があるとか言って。それに、家があんまり裕福じゃないからぼくは小遣いをもらったことがないんですよ。学校終わったら友だちとつきあいもあるでしょ。休みの日にあそこに行ってみるんだ、とか。それがなかなかできなくて、いつもそういう会話には入らないようにして。「自分だけなんでこんなんやろ」って思ってました。

（生田）家族の中で、坂本さんだけ一人で別の家に住むことになったのです。義理のお父さんの言う事もきびしすぎて、これでは、坂本さんは毎日、気持ちが重くてしかたなかっただろうなあと思います。

そういうこともあって、中学校の２年生の半ばから不登校になったんです。不登校をしている間、中学校２年生のクラスメートが「学校出てこいよ」って寄せ書きみたいなのして、届けてくれたりとかはありました。ただ、それ持ってきてくれたときは、ぼくはもう引きこもり状態みたいやったんです。誰にも会いたくないっていうかんじでね。それに、中学２年生から身の回りの世話もほとんどしてもらってない。風呂代とかもめったにくれないから、真っ黒けだったんですよ。母親もぼくに構ったりすると、義理の父親に殴られますから。そういうのもあって、友達がアパートに来てくれても、なかなか顔も合わせら

れなかった。

（生田）お風呂にも入れないなんて、ひどいなあと思いました。それだと、友だちと会いにくくなるのも「わかるなあ」と思いますよね。

母親からは、「家の経済状態がこんなんやから、あんたには悪いけどひょっとしたら、高校には入れてあげられへんかもしれん」って言われてました。
中学を卒業する２ヶ月前くらいから、ぼくもう働いてたんです。アパートの２階に中華料理の店を経営している人がおって、「学校に行かんのやったら、うち、いま手が足らんから働かんか」って声かけてくれてね。
そこは朝の８時から夜の１１時半くらいまで働いていたんだけど、あるときレジを打ち間違えて。そしたら店主がすごく怒って、機嫌が悪くなったんですよね。「これで売り上げがなんぼ下がったと思ってるんや」とか言われて。２日か３日くらいは仕事してても、口をきいてくれないんですよ。たまに出前の注文の電話がかかってくるんですが、その電話に出たら「そんなもん出とったら店回らへんやろ！」とか当たりちらすようになってね。それで３日くらいはガマンしてたんですが、これじゃもうこの店でやっていけんなぁと思ってね。
それと、その店は月に休みは１日くらいで、給料は手取りで７万円くらいでしたけど、あとで計算してみたら、１時間で１７０～１８０円とかなんです。それでその一件じゃないですか。それでそこを辞めました。
でも、店主がぼくと同じアパートの２階に住んでいる。顔を合わせづらいから、小学校のときの同級生の離れの押し入れの中にかくまってもらったり、公園の土管の中で過ごしたりして１０日くらい逃げ回ってたんです。その間、４日くらいは水だけで暮らしてました。

（生田）坂本さんのしてきた仕事をみると、たいへんなのに入るお金が少ないのが多いのにびっくりします。最初にしていた中華料理屋のアルバイトは１時間で１７０～１８０円ですが、こんなに低いのは本当は法律違反です。店主は、「まだこどもだから」と思って安く使っていたのでしょう。

仕事をさがさないといけないんだけど、お金も減ってきたら、月払いのところは行けなくなってしまうじゃないですか。月払いだったら、給料が入るのは一ヶ月後だから、その間の生活ができないくなってしまいますから。ぼくは貯金なかっですから、すぐお金が入る「日払い」の仕事をさがさなあかんわけです。
その頃、よくアルバイト情報とかに工場の日払いの仕事載ってたけど、夜勤の場合は夜の８時から朝の８時までなんです。「１８歳以上」って書いてあったけど、電話で「１８です」とかうそついて。最初に行った仕事は、すごいきつかったですね。ガラス製品を箱詰めする流れ作業ですよ。ラインには、わめきたおしてる怖いおっちゃんがいる。そのときは、夜の８時から朝の８時までで５７００円です。
日払いでも「面接に来い」というところもあります。だけど、電車賃とか、面接に行くお金がないんですよね。だから、阿倍野から西淀川とか吹田あたりまで（注、３時間ぐらいかかります）歩いて行って帰ってきたことあります（笑）。そうして行ったら、そんなとこでも説教されるんです。面接行ったら「お前は勉強もきらいでこんなことやっとんのか」「中学の時は不良やったんか」とか怒られて。高校入学の肩書きも無いと、やっぱりなかなか厳しいかったんです。
別の会社では、履歴書を見るなり、一緒に行っていた派遣会社の人にチェッと舌打ちをして「中卒やないか、こんな出来の悪いのを連れてくるなよ、私は忙しいんや」とかどなりつけてました。帰りの車の中で、派遣会社の人が「えらい、いやな思いをさせてしもたなあ。おやっさん口が悪うて、ほんまごめんなあ」と言ってくれたので、ぼくの方が恐縮してしまったり。

（生田）仕事の面接でイヤなことを言われる、という話はよく聞きます。坂本さんは、いろいろなつらい事情で不登校になっていたのに、こんなことを言われて、つらかっただろうと思います。交通費がないという話がありましたが、「お金がないので面接にも行けなかった」「お金がないので、日払いの仕事しか行けなかった」という話は、他の野宿している人からもよく聞くことです。